

# パイダゴースから＜忘れものの女王＞へ

北 岡 一 道

(2006年1月30日受理)

## 1. はじめに

本稿では伝統的な高等教育の記号・メディア環境について管見をおこなう。

教育、あるいは教育現場は、コミュニケーション行動が圧倒的に立ち現れる場所である。教育現場とは、おおむね学校という建物、学校という共同体を中心にして考えてよいであろう。(ときとして企業団体の＜コントローラー＞が、いわゆる現場にも本部にも、おらず、郊外の豪邸でひとり戦略に腐心し、企業の実体が、じつはそこにある。そういった、遠くの＜コントローラー＞や、実体というものは、教育の場合考えにくい。)教育活動の総体は、人間の組織が行う極めて多面的なものであり、ある意味では、政治活動であったり、経済活動であったり、生命活動であったり、(ときには募金活動)とさまざまな相をもっている。

コミュニケーションでは、何かが伝えられる、という図式がある。常識的には、思想や、知識・情報、あるいは技術である。情報などは、(どちらかという)やや一方的な方向で、発信者から受け手へモノが移動するように、伝えられるという見方がある。つまり、これが、講義やプレゼンテーションの形である。話し手、先生はある事柄を言葉ではなし、説明する。具体的な物をみせたり、モノのイメージである写真(スライド)をみせたり、さらにその抽象像である図や表をみせたりする。情報は話し手から、聞き手に向かっていく。

たとえば、(動作的)技術の場合は、情報のようにつたえられも、するが、発信者みずからが、動作をみせてやることが、典型となる。(発信者

が2人くらいで手分けしてやってもいい。しゃべって説明する人と、もう1人動作をやってみせる係りがいても、よい。)そして受け手はその動作技術が、実際に行えるか、確認することが望ましい。受け手の動作が形ばかりでよい場合もあるし、特殊な有効性をもつことが要求される場合もある。こうしたコミュニケーションは、いわゆるトレーニングで、そこには、一方向から、逆方向の伝達がみられる。また双方向の伝達が頻繁におこなれるとき、いわばコミュニケーションのサイクルができあがる。

現在の学校教育のなかでは、あまり中心的でないが、学生がまず、問題や困難をもっていて、学生から指導者に課題をもちかける場合がある。コミュニケーションの(形のうえでの主導者は)学生となる。学生が問題をかたり、指導者はそれをきくことになる。問題(と状況)の性質によって、学生はかたるだけで終わるときもあり(心理的負担が軽減する、あるいは、かたまりながら、解決を自分でみつけている)、指導者が論理的・技術的な回答を構成するときもある。典型は(かならずしも、＜心理＞に限らない)カウンセリングが、これにあたる。＜かたり＞、＜きく＞というコミュニケーションの方向だけからするとプレゼンテーションとかわらない(そう解釈して分析するやり方もあろう)が、類型的には質問と答えという型を典型として、コミュニケーション・サイクルができる。

コミュニケーションの方向性は、＜矢印＞として、教育現場であらゆる方向性をもって飛んでいく。典型的には言語(記号)として、マンガの吹き出しのように、1人の成員からもう1人の成員

へ飛んでいく。1人の成員からある（部分）集団の成員へも飛んでいく。（典型的である〈話し言葉〉は、まさしく「飛んでいく」といえる。自分がいった言葉を、一瞬くやんで、そこで、おいかけて相手に届くまえに、つかまえられる人はいない。）ただし、（ある部分）集団から1人の成員にむかって（同一の）メッセージをなげかけることはない（、きわめて非典型である）。また同様に、集団から集団に向かってユニゾンでかたることもない（、きわめて非典型である）。これらの矢印は学校集団というコミュニティをかけめぐり、一部は外部にでていく。また、外部からの矢印もはいつてくる。また、学校集団内での（クラスを典型とする）部分集団内でも、部分集団の境界での、矢印の動きがある。ここで、コミュニケーションの開放性ないし閉鎖性の問題が生じる。

言語における文字は、音声とは（一連の言語制度として連続しながら）、認識領域では、視覚イメージを構成する。視覚は、音声とはことなる方向性、指向性をもっている。人は顔（頭部）に目、耳のそれぞれ視覚、聴覚の受容器をもっている。（他の受容器も集中している。この配置は、大雑把には生物としての後口動物の特徴である。）言語制度についていうと、音声言語において、口（肺から唇まで）と耳を、それぞれ、発信と受信につかっている。視覚言語（ないし文字言語）は、目を受信につかっている。手が典型的な発信の道具（手で文字を書く）だが、文字の普遍性・必然性には、異論もあろう。いずれにせよ、目は人の前方に2つ、類人猿（以上）の特徴として双眼視をする状態にあり、したがって、比較的せまい視野と、視線の方向性がうまれる。

うえて、教育現場でのコミュニケーションの方向性ということにふれた。これは、一般の学校の状態で、コミュニケーションに障害のある人がいる（あるいは、混ざっている）状態ではない。たとえば、（いわゆる）健常者のクラスに全盲の学生が参加している場合だと、その学生は、全盲したがって視覚領域のコミュニケーションが阻害されており、クラス全体のコミュニケーションにおいては、その阻害状態への配慮が、必要になる。一般に視覚領域の情報は伝えられず、また音声言

語に対応する文字（言語）も新奇な文字の導入は不可能である。日本語ではおおくの文字（漢字）があり、つねに（学習の場では）、新奇な文字を学ぶという問題がある。英語（など）では少数のアルファベットさえ学べばあとは新奇な文字に出会うということは基本的にない。（英語的な文字言語の文脈に関連して出てくる特種記号は別にして。）言語に付随するパラ言語の情報も音声的なものにかぎって有効となる。メタ言語、メタ記号的な発言も、視覚領域あるいは、その経験にかかわる事柄は、伝達が（基本的には）不可能である。

ただ実際的には、視覚・音声領域と簡単にわりきれない部分もある。たとえば、視覚障害者の（例外的な）学生は、点字板とともに、（現在では）パソコン入力によるノート（・テーキング）ができる。提出物についても同様で、パソコン入力にかかわる媒体でだしてくれれば、教員としては、一般学生とかわらない処理ができる。（コスト、既存パソコンソフトの関係から、今のところフロッピーが現実的なようである。）その媒体は、学生が入力するときは手（触覚）であるが、媒体からの情報は、（一種の）点字としても、また朗読ソフトによって音声としても、うけとることができる。提出された媒体の教員側の処理領域については、一般の（健常者としての）各種ソフトによって、処理されうる。（たとえば、点字・普通の文字の対訳テキストとしてプリントアウトすることも、ふくめ。）

コミュニケーションの現場における言語発話の方向性とは、だれが、だれに向かってはなしているか、ということだった。また（これは、ある程度）人の顔にある〈耳〉と〈目〉の方向性にも対応する。口は人の頭部の前面に位置し、発話の相手にむかっている。（キリギリスやセミのように、体（体躯）の後部に発声器官があるわけでない。）耳は、また耳殻（みみたぶ）は（外耳道とともに）さほど方向性がない。（今、きいている相手より、まわりの危険を〈耳は聞こうとしている〉ようだ。）言語記号としても、音声はさほどの方向性をもたず音源から周囲にひろがる。

これに対して、文字言語は（歴史的に）使用されてきた媒体、つまり紙（－竹簡－貝葉－パーチ

メント)の性格から、かかれる面と、その反対側の面という方向性をもつことになる。また、(おおくの言語で)その平面に線状にかかれるため(じつは平面の小分割)、上下・左右といった方向性が、文字(あるいは文字集合)に生じる。これは、文字記号と(視覚的という点で)似た手話とやや対照的である。手話の場合、紙(などの)媒体はなく相手の(おもに、手と上半身の)動作を(典型的には、対面で)視覚的によみとる。紙のような表面・裏面という関係はないが、(対面の場合)しぐさは左右、逆になり、相手に向けた手のひらは自分にとっては手の甲となる。しかも、よみとる＜聴衆＞(オーディアンス)は対面とかざらず、真横にすわっている受け手もいる。受け手はつねに(音声言語とだいぶちがう)文字(言語要素)認識の補正をしいられる。

文字記号の方向性のあり方は、だいたいそのまま印刷文字になってもひきつがれる。むしろ丁寧な写本は、(＜印刷した文字のように＞)行儀よく文字がならんでいる。日本の巻きもの、軸ものも、うすく罫線をひいて、きれいに文字がならぶ工夫をしているものがおおい。巻き物でなく、折り綴じの場合はさらに(現代の)一般印刷物と似た形、方向性をもつことになる。

文字記号については、＜いわゆる自然言語＞の使用ではないが、教育的には辞書の利用は(なかば)日常的である。中学生程度から、多く経験(教育指導は様でない)することであるが、日本語には＜国語辞典＞と＜漢和辞典＞が、あるのに英語では(対象言語の未知語をしらべるかぎり)＜英和辞典＞しかない。そして＜国語辞典＞と＜英和辞典＞の検索は比較的単純だが、漢和辞典のしらべ方は複雑である、という印象をもつ。それぞれ言語のもつ文字の数(リスト)が、互いに特徴的に違う。

そして、以上は言語内の文字のことであるが、教育的には、＜言語に関連するが言語外＞の特殊な文字(ないし)記号が存在する。たとえば、英語の発音記号である。盲人用の英語パソコンソフトに発音記号がなかったり、よく出回っている電子辞書の発音記号が(画面表示の関係で)本来の記号の形にくらべ、かなり省略的に表現されたり

している。(文節要素の記号は対応してつくればよいが、超分節要素の記号は、その超分節性の表示に工夫がいる。)発音記号のような特殊な記号自体の検索は、辞書の(それぞれの)検索体系とまったく異質であるため、その検索システムにとりこむことも、その情報自体を記載することも、(教育的な現実性をともなうことは)なかなかむつかしい。

## 2. 大学の問いなおしの視点

現在、高等教育の問いなおしがさかんである、ようにみえる。問いなおしは、いつの時代にもあろうし、その関係者には、＜いまは、さかんだ＞とみえるであろう。一般には、戦後3回おおく高等教育の反省が求められたことがある、とされる。問題のポイントのみのべると、1回目は経済不況のひどかった時期。＜大学はでなければ、仕事口がないのはどうしてか、というわけだ。2回目は安全保障条約など政治・外交的問題の時期。大学は、政治、外交的状况にどう発言するのか。いまが、3回目で、将来的に予想される少子化の時期。少子化に高等教育は対応すべきだ、という問題意識である。

中心的な問題を取りまいて、実際には複合的な課題が生じてくる。(かつて、年配の方にうかがうと、学生時代、政治的なデモに参加したことをおはなしくださった。2回目の時期。「あまり政治思想はわからないが、普通の学生がおおぜい参加するので、自分もデモにいったみた。火炎ビンをなげて、お祭りのようで、たのしかった。」)問いなおしは、学生がデモをするような、当事者が直接、意見をあらわす行動をとることもあるが、マスコミでとりあげられたり、文学や映画で象徴的な作品として発表されたりすることもある。それぞれが、中心的、付随的課題をあつかう。(非意図的なものもふくめ。)

日本の大学は、欧米にならった部分がおおく、当初はドイツの大学、戦後それにつけたす形でアメリカの大学をまねたとされる。(日本の法律制度とはほぼおなじ。)プロイセンで19世紀につくられたベルリン大学は自治権をもつ研究中心の総合大学であった。まず、日本の大学はこれに範をとっ

た。敗戦後、アメリカの教育体系（単線型）がまねられ、教育機関としての性格がくわった。

したがって、たとえば、おなじく大学（大学寮）の名をもつ、日本の歴史上の教育研究機関や、ふるくは本邦が宗教の影響を受け現代は世界最大の大学（カルカッタ大学）をもつインドの教育伝統などは関係がない、とされる。（西欧的な知識の1つの中核である、＜ストイケイア＞は日本の初等教育にも、はいりこんでいるが、東洋（インド）的な形式的な知的訓練である＜アスタードヒューイー＞は、全教育過程をととして、影響がない。）このなかで日本の大学については、旧来、大学コミュニティのつよい結束や、大学修学を重視する傾向が特徴的である、と指摘されてきた。たとえば、大学修学をもって、高い実務能力、実際の経験にかえる、あるいはそれ以上に評価する、ということである。

高等教育機関への通過テストは、中国での伝統的な科挙のタイプで、中等（以下）の教育内容を学習（ほぼ暗記）したことを、ペーパーに正確に記述することが、もとめられる。（芸術系は実技も。）準備機関の教育傾向は（ある程度の独自性があるとはいえ）その通過テストに応じることになる。大学機関は、典型的には、都市の中心に教育施設が位置し、寄宿施設と基本的に別で、（寄宿舎があっても部分的で）学生はおおく下宿生などとして、地域に散在する。

これはイギリスでは第2の大学（ロンドン大学など）のタイプにあたり、イギリスの古い大学（オクスフォード、ケンブリッジ、エジンバラの3つ）のように全寮が基本というのと、ちがう。（第3のタイプはいわゆる戦後の新設大学群。）後者は、校舎と同棟の全寮で、起居、寝食をともにするのが教育であるという考えである。学生は生活全般において（完全ではないが）都市の日常から隔絶され、エリートとして＜クラス＞（階級）を構成していく。日本の場合、大学コミュニティの結束がつよいとはいえ、生活は都市のなかに散在しているので、学生全体（教員と学生全体）がこういった特殊なクラスを構成する力はよわい。いずれにせよ、経営的には、業界全体の保護、一企業の保護といったことがあるように、日本でも

高等教育機関はコミュニティとして結束して存立の戦略を講じてきた。こうして、部分集団としてのクラス、コミュニティ単位としてのカレッジ（、カレッジ群からなる、＜カレッジ団地＞のごときユニバーシティー）が成立してきた。

絵画（あるいは地図など図面）で、たとえば、透視図法、遠近法という、技術（ないし方法）がある。絵画の中央（がおおい）に無限遠の点をきめて、そこに向かっていくにつれ、モノが小さくかかれる。（ほかに空気遠近法、消失遠近法も、併用。）これにより、ただの平面である画面に奥行きが表現される。あるいは、目は（意識は）奥行きを感じる。同様に、いわゆる質感や重量感を表現するのに、方法が考案されている。画面には実際の＜質＞も＜重量＞も存在しないのに、それが（うまくいけば）感ぜられる。演劇における舞台でも（舞台には若干の奥行きがあるが）、舞台なりの遠近法が活用される。（西洋の伝統的な舞台では、舞台後方にむかって若干、せりあげている、など。）

大学ではいま、消費者の観点がとりいれられつつある、といわれる。学生が消費者で大学がサービスの提供企業という見方である。（ことの善し悪しはべつにして。）教育機関が提供するサービスはあいまいである。教育内容は、小売店の店頭にならんでいる果物とはちがひ、手にとるように提供される時点で、（中身が比較的是っきりと）わかるものでない。（以前から経営的な環境におかれてきた、並行教育機関はそうしたサービスの明示につとめてこられたことであろう。）

伝統的に、日本では官学が安定した組織と威信をもってきた。大学制度の直前の江戸時代だけでも、（私塾はおくとして）地域の藩校や、中央の昌平坂学問所（中国、朱子学の研究）と、蕃書調所（洋学、後期は英学的調査）はそれぞれかわらぬ威信をもち（組織的な沿革はあるせよ）、地方、中央の官立系高等教育機関へと地縁・人脈でひきつがれていった。（朱子学の研究・普及をめざした昌平坂学問所ゆかりの湯島聖堂は、現東京大学（本郷）の南に隣接し、孔子（など朱子学系の聖賢）の霊廟である。世界一おおきいという孔子像も中国本土にはなく、台湾からおくられ、ここにある。）

明治初期にあたらしかった高等教育機関は、過去の威信もひきついで、ようである。

日本の大学が、当初、ドイツの仕組みをまねたとしても、それを、ひきうける土壌が、とくに、その土地には伝統的威信が（ぬぎすてられた）光背のように、そこに存続していた。機関（体系）の威信全体の一部、伝統的な威信の要素の一部となっていた。また、以来さまざまな威信の働く装置が工夫されてきたことだろう。この建物が、この組織が、永遠の学問への奥行きをもつと、人の目に感じさせる＜遠近法＞である。

### 3. アカデメイアと道具

西洋的な研究・教育の範型（の有力なもの1つ）は、古代アカデメイアである。プラトンは、ソクラテスに学んだこと、エジプトなど各地を遊学したことが、ある。が、アカデメイアの創設、したがって、その教育・研究の方法は、プラトンに帰せられる。ピタゴラス学派の研究団体、ソフィストの教育方法、弁論術の学校などに方法を学んだとされる、が学問的にすすんでいた（はず）のエジプトの影響は、問題にならないようだ。（アカデメイア自体の文献資料がすくない、といわれる。）

アカデメイアは紀元前387年（ごろ）、40歳のプラトンが、設立し（つくったとされ）、紀元529年まで900年間ほどつづいた。学園は教育・研究をおこなったが、ヨーロッパがキリスト教化されたのちも、＜自由な＞、つまり非キリスト教的な立場であった。学園後期は、東ローマの領内にあたり、皇帝ユスチニアヌスの政策により、非キリスト教的学校として閉鎖をしいられた。学園はアテネ（市）の郊外で、古代ギリシャの英雄（神人）アカデーモスを祭る土地（境内）にたてられ、学園名アカデメイアをいただいた。（湯島と似た発想、環境。）その境内は庭、庭園といわれる。

ここでは、基礎的な学問（訓練）として幾何学と天文学が重要視された。後段の議論の哲学的基礎をあたえるから、という考えであった。プラトン自身の教育目的は、政治、とくに哲人政治にあり、そういった政治にふさわしい人間を教育によっておくりだすことを目当てとしていた。プラトン自身が政治にかかわる機会があったが、政界

から受け入れられず、哲人政治の理想は失敗している。

この哲人政治を理想とする教育という点では、中国の四書のひとつ『大学』も、政治をおこなう人の採るべき＜徳＞が説かれており、哲人政治をめざしているといつてよい。かつ、その名＜大学＞は極東地域の現在の高等教育機関群を、（おおくの場合）さす言葉となっている。古代のアカデメイアが（プラトン個人にあっては）哲人政治を目的とし、近代の官立＜アカデミー＞を意味する言葉となったのに類比的だ。研究教育機関としては、アカデメイアはそれ自体の生命力をもち、プラトンの死後まず、甥が継ぎ、都合900年の長きにわたって古代・中世世界に存続しつづけることになる。

ややおくれで、数学者ユークリッド（エウクレイデス）は同じく、古代ギリシャ出身ながら、エジプト、アレキサンドリアに招聘され、周知の体系を完成している。したがって、アカデメイアでの＜幾何学＞は（十分に）ユークリッド的ではない。ユークリッドは永遠をめざすためにプラトンとは別の方途をとったといえる。別とは、土地と分野という2重の＜場所＞でのちがいである。

アカデメイアの学生諸君の文具はどうだったのだろう。（もちろん、先生も。）あるいは、勉強の道具、教具、教室など知識・思想をかためていく記号の道具はどうだったのだろう。今の日本の小学生諸君は、毎日ランドセルは、パンパンで、教科書もプリントも連絡書類も、ノートも、ほとんどみんな、紙だらけだ。（小学生は「小型のゲーム機で、勉強ができたらいいな。」と思っているかもしれない。）しかし、（いわゆる製紙法による）紙は、古代ギリシャにはまだ中国からつたわっていないから、紙のノートやプリントもない。学問としても、現実的な授業でも、基礎学である幾何学と天文学が紙のうえには展開できない。

アカデメイアがどんな、記号をのせる道具（メディア）によって成立したのだろう。ここでは、一般的に、また詳細にみることはできないが、古代世界の常識として2つの筆記の方法がある、であろう。ひとつは、インクとペンと紙（羊皮紙かパピルス）の組み合わせである。もうひとつは、

スチルスと石盤の組み合わせである。

インクとペンは、想像がつくので、あまり考えなくてよいだろう。ペンは、＜ペンナ＞のラテン語名のとおり、鳥の羽、ガペンは5・6世紀から使われているとされる。それ以前はアシの茎や獣骨をけずったものだった。紙(パルプ製紙による)は当時存在しなかった。パピルスは古代エジプト時代から普通につかわれ、ほぼ紙のようにつかわれた。今の文具用の紙よりやや厚く堅いが、それほど高価ではなく、適当な保存性をもっていた。エジプトでは紀元前25世紀から、後10世紀まで使用された。みじかなところでは、聖書(旧約)でも何度か言及され周辺世界にひろがっていた。

羊皮紙であるが、英語名＜パーチメント＞の名の示す小アジアのペルガモンで紀元前190年ごろ発明されたとされる。(ラテン名、カルタ・ペルガメナ。ペルガメナの英語名まりがパーチメント。) ヒツジ、ウシ、ヤギの皮を石灰水につけて脱毛し、のばしたものである。獣の皮でありパピルスより各段、高価であるが、保存性がたかい。一般にひろまり、紙が出現・普及する12世紀ごろまで、使用された。(工芸用には現在も。)

古くは英語でも、＜紙＞のことを＜ベジタブル・パーチメント＞(植物の羊皮紙)という表現があり、＜紙＞を新奇なものとして感じた当時の人のみかたがうかがえる。(パーチメント・ペーパーといって、羊皮紙に似せた＜紙＞もある。) 羊皮紙をかさねた＜折り綴じ＞(本)はコーデクスといわれるが、手書きであること以外は、今日の印刷された本と同じ形式であり、これが今日の＜本＞の原形といわれる。

スチルスとは(日本的な感覚からは、)想像しにくい、鉄筆のようなもので、古代においては獣骨(ないし金属)の一端がとがったものであった。(30年ほど前まで、日本の謄写版時代の＜鉄筆＞になじんでいた方もおられるであろう。) 石盤(タブレット)にロウをひいて、カリカリとスチルスで字をかく。そして、書き損じや不用な字は、スチルスのもう一方のまるくなった端で、ロウをならして消すのである。(古代ローマなどで頻用されたが、ギリシャでの頻用については、申し訳ないないが、手元に資料がない。)

スチルスが興味深いのは、スチルスがコンパスに似ていること、小さな点やかたい線を描くことである。石盤はおれ曲がることない平面(の一部)をなしている。つまり、コンパスと定規の世界、ユークリッドの操作体系と親和的なのである。また日本語で＜白紙＞と訳され(、単なる＜紙＞)のことでなく哲学的含意のあ)る＜タブラ・ラサ＞の基本的イメージは、スチルスがまだ線を描きこんでない＜石盤＞なのである。

はるか東のかなた古代中国では、文字をせっせと竹の小板(竹簡、護摩木のようなかたち)や木の小板にかいていた。また布(帛、きぬ)にかくこともあったが、高価なもので一般には手がだしにくかった。この2つ(ないし3つ)の材料が平面をもってかけられる道具だった。これらが、また書籍の材料ともなった。伝説では2世紀ごろ後漢時代に紙(製紙法)が発明された、とされるが、实际的に普及したのは4世紀ごろである。竹簡、木簡はすぐには衰退せず、紙とともにつかわれた。(安く、耐久性がある。竹簡、木簡を駆逐したのは、むしろ印刷術であったのだろうか。) 紙ないし製紙法は、まずアラビアに、ついでヨーロッパにつたわる。

アカデメイアの学生諸君は、頻繁な討論のためあまり書くことがなかったかもしれない。石盤にカリカリとメモをする学生もいたことだろう。お金持ちの子はパピルスにかいて、ノートを書きためる、ことができたのではない。いずれにせよ、豊富な紙のようなものはまったくのぞめない。

その後、＜アカデメイア＞の名が近代(国家の)＜アカデミー＞にうけつがれる。ただし、教育研究機関群の関係がやや複雑である。まずキリスト教化した世界に教皇権がひろがる。この教皇権のもとに僧院学校が設立、運営される。教皇権をきらって、中世の学生・教員のギルドからなるヨーロッパ型の大学ができあがる。(この間、本家のアカデメイアは東ローマの皇帝によってつぶされる。) しかしこのギルドにおいても、神学の重視あるいは、学内にチャペルがあり、(セクターはちがうが、)キリスト教の力は強かった。ヨーロッパの近代国家は、このキリスト教の影響から自由な知識・研究活動をもとめ、皇帝によって、つぶ

された＜アカデメイア＞の名をよみがえらせ、近代＜アカデミー＞を設立していく。

近代アカデミーを、中国をまねて＜翰林院＞と訳す（こともある）が、翰林院は唐時代、からの官立機関である。国家事業としての事典（類集）編纂は明の時代に最高に達し、明の百科事典『永楽大典』は2万2877巻、1万1095冊におよぶ。フランスなどのアカデミーの言語辞書、百科全書派の事典（刊行ということもあるが）まったく、比較にならない。

古代ギリシャのアカデメイアの（たぶん）首席学生であったアリストテレスは、同じアカデメイアの教師になることはなく、しかし、同じアテネ市で学校をひらいた。アポロン神の神社のとなり、神社の名にちなみ＜リュケイオン＞という学園名をとる。（アポロン神は＜オオカミのアポロン＞（アポロン・リュケイオス）というトーテムによる通り名があった。）アカデメイアが近代官立アカデミーに名をあたえたように、＜リュケイオン＞はフランスの公立中（高等）学校＜リセ＞に名をあたえている。（古代ギリシャの公立体育場は＜ギムナジオン＞と呼ばれ、ドイツの中等学校＜ギムナジウム＞の語源となっている。）

リュケイオンの人々はまた、ペリパドス（散歩をする人）学派といわれ、アリストテレスは学生（弟子）と散歩をしながら授業をしたという（1つの）伝説がある。伝説ということを前提にしたうえで考えると、散歩をしながらでは、たぶんノートはとれない。作図も計算も（筆算では）できない。石盤やパピルス（あるいは地面にかいてもよいが）で記号化される技術的な操作をとまなう授業、あるいは議論が基本的にはできない。形而下学（ピュシカ）も歩きながらでは、実験できない。アリストテレス、さすが（マケドニアの）お殿様の侍医の息子らしい、大脳生理をかんがえた工夫にみえる。が、同時にすべての議論が、（自然言語でおさまる）いわば＜お話＞に落ちつくのではないか、と危惧される。実際、アリストテレスは＜偉大な常識人＞と形容される。伝説としたうえで。

#### 4. む す び

以上、伝統的な高等（研究）教育機関の、特徴的な記号・メディア環境をごく一部、素描した。日本の大学は、ヨーロッパの大学に範をとった、とされる。同時に日本にはそれを移植してきて育てる土壌があった。ヨーロッパの大学も、教皇権から離れる形で成立し、制度・形態的には僧院学校（修道院学校）をひきついでいる。しかし、（あまり問題になることはないようだが、）アラビアの影響があるといわれ、ひとりヨーロッパ世界でおちつく現象ではない。また、最古といわれるボローニャ大学も、11世紀ごろイルネリウスが注釈学派としてローマ法を講義しはじめたところが創設時期とされる。が、ある伝説ではボローニャ大学のはじまりは5世紀（425年）であるという。この場合、現在の一般的な大学観は修正をしいられる。

いずれにせよ、ヨーロッパのふるい大学群は15世紀のグーテンベルグ以前に、成立し、印刷術をふくむ（それは、きわめておおきい）様々な記号あるいはメディア環境で、成育してきた。＜文法論＞をあらわす英語＜グラマー＞は、もと＜かかれたものの学＞（端的には文字の学）であった。＜文体論＞をあらわす＜スタイリスティクス＞は語源的には＜かくものの学＞（端的には筆記具スチルスの学）である。

江戸川乱歩は、自分の幼いときからの読書体験にくわえ、活字印刷にかんする体験やあこがれをかたってる。インクのおい、活字の美しさ、印刷工程という神秘。活字を一生懸命あつめたりしている。（乱歩にとっては、謄写版印刷ではちょっとダメだ、ということになる。）

文字の学が文法論と抽象化され、筆記具の学が文体論と抽象化される。テオリアは一方で必要としても、記号の具体物的側面への注意も大切なようにみえる。乱歩のように記号生産の楽屋裏をおとずれ、具体物であるメディアが＜天駆ける記号＞にメタモルフォーゼする瞬間をみにいこうではないか。

古代ギリシャには教育担当の賢い奴隷がいてパイダゴゴスとよばれた。今日もパイダゴゴ

スのこんな嘆きがきかれる。「うちのソピア（知恵）ちゃんは、とてもお利口だが、お利口すぎて筆記具をよくわすれて困る。これから、アカデメイアの〈忘れ物の女王〉に書くものとどけなくちゃ」と。

#### 参考文献

1. ウィキペディア、〈アカデメイア〉の項。  
"http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%AB%E3%83%87%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%82%A2"

2. 江戸川乱歩「活字と僕と－少年の読者に贈る」  
新保博久、山前譲（編）『江戸川乱歩コレクション、  
乱歩打明け話』67-83  
河出書房新社（1994）

#### 付 記

欧米の大学事情のことをお話しいただいた仁愛女子短期大学、小川英雄先生、記号分析について先端の状況をお教えいただいた同、大西新吾先生、教育に関する理論についてご教示いただいた同、荒井聡史先生に、お礼もうしあげます。